

## 「スモーカーズ・パラドックス」は存在せず

喫煙が冠動脈疾患（CAD）の危険因子であることは広く知られている。しかしながら、冠動脈疾患とくに心筋梗塞を発症した喫煙者では、非喫煙者と比べて予後が同等であるか、あるいはそれ以上に良いという「スモーカーズ・パラドックス」を示唆する研究もあり議論されている。本研究では、冠血行再建術を受けた患者を対象にスモーカーズ・パラドックスを検証した。

複合冠動脈疾患の患者で経皮的冠動脈インターベンションもしくは冠動脈バイパス術を施行された 1,793 例を対象に、5 年間追跡した。喫煙については、試験開始時、6 ヶ月、1 年、3 年、5 年の時点の喫煙状況を確認した。その結果、対象者の 1/5 が試験開始時に喫煙していたが、そのうち 60%は冠血行再建術後に禁煙していた。いずれの再建術においても、喫煙者では心筋梗塞の再発率が高く、予後は不良であった（調整後ハザード比 2.08）。また、喫煙は死亡・心筋梗塞・脳卒中の複合エンドポイントや主要な脳・心臓血管イベントの独立した予見因子であることも明らかとなった（ハザード比はそれぞれ 1.8[p=0.001]、1.4[p=0.02]）。

したがって、複合冠動脈疾患の患者において、冠血行再建術後の予後は喫煙により悪化することが示され、スモーカーズ・パラドックスは存在しないことが示唆された。術後の予後改善のためには、禁煙を強く勧めることが重要である。

出典：Journal of the American College of Cardiology. 2015; 65(11): 1107-1115